

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代ブータンにおける聖俗の境界： チャムの担い手とその変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, 万里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5234

現代ブータンにおける聖俗の境界—チャムの担い手とその変遷—

宮本万里

1. グルの足跡をたどる道：仮頭舞踊チャム

ブータン憲法（2008年公布）において仏教は「国の精神的遺産」と位置づけられている。17世紀にブータンの国土を初めて政治的に統一したのは、チベット仏教のカギユ派の一派であるドゥク派の座主ンガワン・ナムギャルであった。それ以来ブータンはチベット仏教文化圏の諸国の中でドゥク派の国として位置づけられてきた。

しかし、ブータンに仏教が伝来したのはずっと以前のことで、それはおよそ7世紀にさかのぼり、本格的導入はさらにその1世紀後、チベット・ブータンでは第二の仏陀として位置づけられるグル・リンポチェがブータンを訪れた時のことである。グル・リンポチェは、当時からインドやチベットではよく知られた高僧であり、その霊力と名声はヒマラーヤの奥深く、現在の

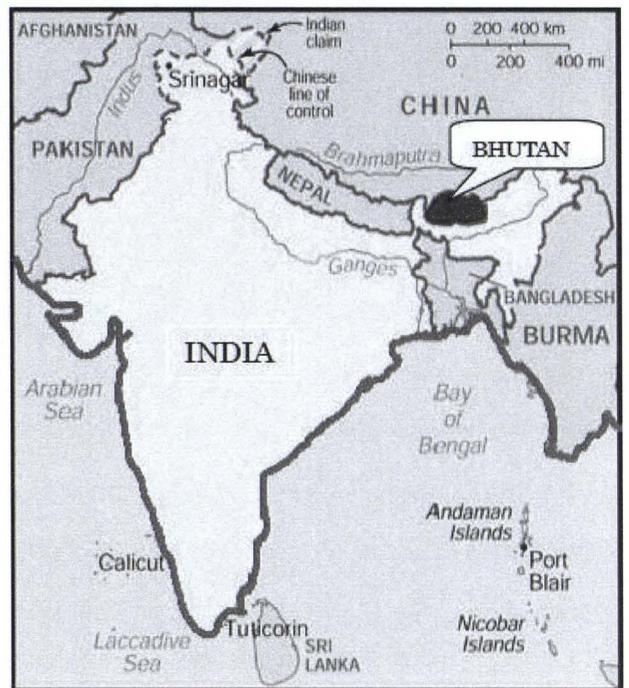


図1 ヒマラーヤの仏教王国ブータン



写真1 僧院の壁に掛けられたタンカ。中央にパッチワークで大きく描かれているのがグル・リンポチェ。(2009年 宮本撮影)

ブータン中央部まで届いていた。

このグル・リンポチェのブータン来訪に関しては、国内に様々な逸話が残されている。ブータンの人々にとって彼の足跡をたどる方法の一つは、各地に残された聖跡、つまりグルが瞑想した洞穴や岩に残された手や足や頭や男根、あるいは杖の

跡といった聖跡・聖地を辿る方法であり、もう一つは仮頭舞踊チャムに残された痕跡を辿ることである。

ブータンのチャムの起源をひも解くと、グル・リンポチェと、後のペーマ・リンパにまつわるものが多く、ブータン社会のなかでも非常に重要視されてきたことが分かる。グル・リンポチェはチベット仏教文化圏では言わずと知れた8世紀の聖者であるが、ペーマ・リンパは15世紀半ばにブータンで生まれた高僧であり、グルがブータン国内の各地に埋蔵したと伝えられる数多くの秘仏や経典を見つけ出した埋蔵宝典発掘者（テルトエン）である。彼はブータン国内ではグル・リンポチェに次いで良く知られた高僧であり、彼にまつわる逸話や聖跡も多い。また、ブータン社会でいわゆる高貴な家柄とされる家系の多くは、何らかの形でペーマ・リンパの系譜に連なるといわれる。ちなみに、現在ブータンを統べるワンチュック王家もまた、中央ブータンで生まれたこの高僧の系譜に繋がる者として自らを位置付けており、ペーマ・リンパはブータン人にとっては極めて身近な聖者であるといえるだろう。

2. ブータン社会における聖俗の境界

ブータンにおいてもチャムは、チベットやモンゴルのそれと同様、基本的には人を瞑想によらず悟りの境地へと導く四つのヴァジラヤナの教えの一つとして位置づけられており、人々はチャムを見ることで苦しみの輪廻から開放され、祝福を得ると考えられている。しかしながら、ブータン各地で組織されるツェチュ祭¹をみていくとき、チャムの担い手が宗教界に属する僧侶だけではないことに気づかされる。

ブータン国王の命により長らくブータンのチャムを統括・指導してきたダショー・シテ・ドルジ氏によると、現在のブータンのチャムは神の領域（the godly kind）に属するものと人の領域（the human kind）に属するものの二種類に分類できるという [Dorji 2001]。そして人の領域に

属する仮頭舞踊は一般にベチャムと呼ばれる。トンサ県のゾン（仏教僧院を兼ねた地方行政府で城塞型の建造物）での聞き取り調査によれば、トンサ・ゾンのチャムでは、全てのプログラムはゲロン（出家僧）によって演じられる演目と、ミナップ（一般の村人）によっ

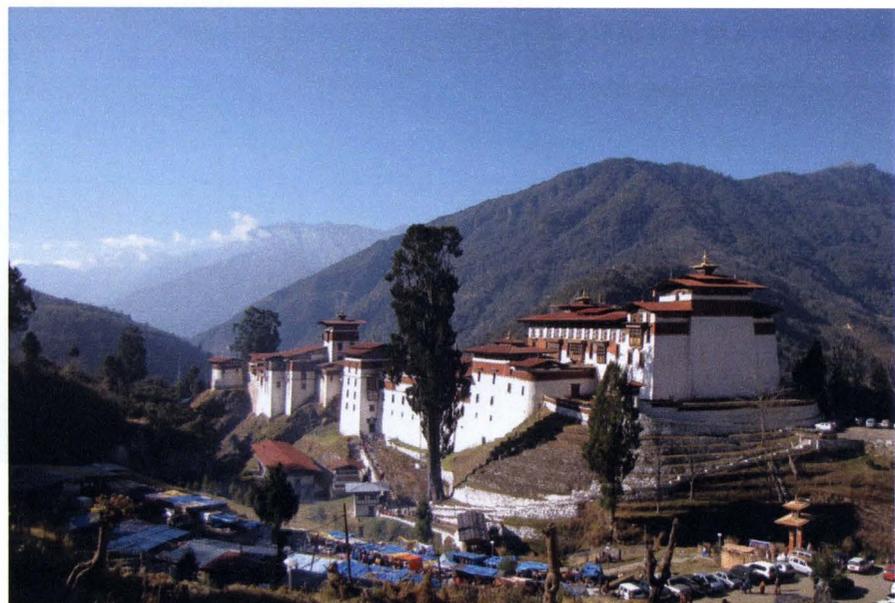


写真2 トンサ・ゾン全景(2009年 宮本撮影)

て演じられる演目とに分けられており、このミナップによって担われる演目が一般にベチャムと呼ばれる。

しかしながら、チャムを取り入れたツェチュの形が、国内のほとんどすべての県のゾンに導入され、さらに村落社会が所有する寺院でも取り入れられて広く普及してきたブータン社会では、重要なチャムの演目は、たとえ僧侶の舞い手が不足していても、遂行すること自体に意味があると考えられている。例えば、私が村落調査を行っているトンサ県のN村では、全てのチャム・プログラムをつつがなく遂行するため、最も宗教的な踊りの一つであり、一般には僧侶のみしか演じることを許されないとされるシャナ（黒帽）の踊りまでも、僧侶と俗人を交えて演じられていた。

このように、村落社会でチャムにおける聖俗の境界が限りなく曖昧である背景の一つとしては、ニンマ派仏教文化が根強く残るといふ社会文化状況が考えられる。

よく知られるように、チベット仏教のニンマ派では基本的に妻帯が認められており、様々な戒律もドゥク派のそれより一般的に緩いとされる。また、グル・リンポチェの伝説に多く残されるように、仏教を本



写真 3 トンサ・ゾンのシャナの踊り(2009年 宮本撮影)



写真 4 村祭りのシャナの踊り(トンサ県 2004年 宮本撮影)

格的にブータンに伝来させる契機となったこの高僧は、各地の土地神や精霊・悪霊を調伏し、それらを守護神として取り込むことでブータンの土地に仏教を浸透させていったとされる。こうし

た経緯は、ブータンの各地に残されたチャムとその継承の形に残されてきた。つまり、土着の神々や精霊の怒りを鎮め、土地の守護神を讃えるためのチャムが村落社会では大切に維持されており、そしてそれらのチャムのステップが、世襲のラマ（つまり妻帯した高僧たちの子孫）によって維持されてきたという点が、聖俗の境界を極めて往来可能で書き換え可能なものとしてきたのではないだろうか。

例えば、ブムタン県にある有名なジャンペ寺のツェチュでは毎年、テル（宝）チャムとよばれる全裸での踊りが行われる。これは、グル・リンポチェが寺の建立を毎夜妨害する悪霊の気を逸らすために全裸で踊り、その間にグルの妻が寺の建立を成功させたとする伝説に基づいて行われている踊りである。このテルチャムの指導は、ある高僧につながる高貴な家柄とされる一家の男子によって代々引き継がれており、彼らは宗教的な修行を経ているにも関わらず「ラマ」の尊称で呼ばれてきた。そして、この同様の伝説に基づくテルチャムを維持する村が、ブムタン県から南西に下ったトンサ県にも一つ存在し、そこでも同じラマの指導のもと、グルが舞ったとされるチャムが村人の間でひそかに継承されている。

しかしながら、ブータンの地域社会におけるこうした実態とは別に、現在トンサ・ゾンなどの政府直轄の僧院で行われているチャムには、ドゥク派の影響が色濃く表れている。それはつまり聖俗の境界の明確化と、仏教の神々と（ペルデンラモなど王家が国家の守護神と認めた神々以外の）土着の神々との差別化である。こうした方向性を持ちながら、ワンチュック王家の下ではチャムもまた、その標準化と規格化が試みられていくようになった。トンサ・ゾンの僧院組織の行政官であるペマ・デンドウツプ氏によれば、「ゾンにお



写真 5 トンサ・ゾンのツェチュでチャムを担当する僧たち(2009年 宮本撮影)



写真 6 トンサ・ゾンの 2 階からチャムを鑑賞する人(2009年 宮本撮影)

けるツェチュ」という現在の祭りの形は第2代国王によって導入され、それが徐々に主要な県のゾンに拡大していったとのことであるが、そうだとすれば、チャムを含むツェチュそのものが、ブータンにおいては国民統合のツールとなることを期待されてきたといえるだろう。チャムの統合・規格化により、国家によって正統性を認められたドゥク派のチャムを各地のゾンでのツェチュをとおして国民皆が鑑賞し、祝福を受けるという状況は、国民形成にとって不可欠な「共通の記憶と体験」とを人々に共有させることにもつながったからである。

3. 俗人による踊り、ベチャムの全国的な展開

上述のシテ・ドルジ氏によると [Dorji 2001]、現在僧院やゾンの中で「ベチャム」として分類される舞踊は、古くは国王の従者であったベガルパまたは政府の役人によって踊られていたという。またその当時、ベチャムはゾンか各地の寺や僧院でのみ、つまり宗教儀式の間にのみ演じられていたという。つまり、当時のチャムには、踊り手の聖俗を問わず、宗教的な儀礼としての部分が多分に維持されていたということである。しかしながら、第三代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュックが鎖国政策を見直して近代開発に着手した1961年以降、ベガルパによって担われていた踊りは宗教儀礼からは切り離され、独立した形で、宗教的なセレモニー以外の場所でも演じられるようになっていく。

さらに、1967年に政府の中に仮面舞踊局が作られて以降は、チャムは国民文化を代表する文化的資源として、舞踊としての側面をクローズアップされていくのである。先のシテ・ドルジによると、こうした制度化と標準化の試みの過程で、チャムのシステムには多



写真7 村祭りのラクシャマチャム(トンサ県 N 村・2004 年 宮本撮影)

くの改良が加えられ、現在の形へと定着していったという。

現在までに多くのゾンで俗人が担当しているチャムには、主にラクシャマチャム、ドラミツェンガチャム、ペリンギンスム、ギンツォリン、パチャム、シャザム、ドウルダ、ポレモレ、シャヲシャチ等があげられるが、これらのチャムは、元来はトンサのベチャムでのみ演じられていたという。例えば首都ティンプーのラモイ・ドゥブチェンの祭りではベチャムは存在せず、僧侶による宗教儀礼としてのチャムのみが執り行われていたのである。

当時、トンサ以外でベ
 チャムを導入していたの
 は、パロとダガナのみで
 あった。これらの地域は
 シャブドウンのチョシ
 (聖俗二頭体制)の時代
 から東部・西部・南部の
 3地域をそれぞれ統括す
 る行政府とその長(ペン
 ロップ)が置かれていた
 地域である。つまりベチ
 ヤムは、当時は、実際に
 多くの従者(ベガルパ)



写真8 トンサ・ゾンのラクシャマチャム(2009年 宮本撮影)

を持つことのできた限られたペンロップとゾンのみが組織可能なチャムであったといえるだろう。しかし、このベチャムはその後 1954年に首都ティンプーのドムチェへの導入を皮切りに、1961年に東のタシガン、1962年に中央のモンガル、1967年に西のワンディフォダン、1985年に北部のルンチ、1986年に南東のペマガツェル、1988年に南のチラン、1990年にインド国境地域のサムドルップ・ジョンカルにも導入され、ブータン全国へと拡大していった[Dorji 2001]。そして、こうしたベチャムの導入は、各地のツェチュ祭自体の繁栄にも繋がっていったのである。(図2参照)

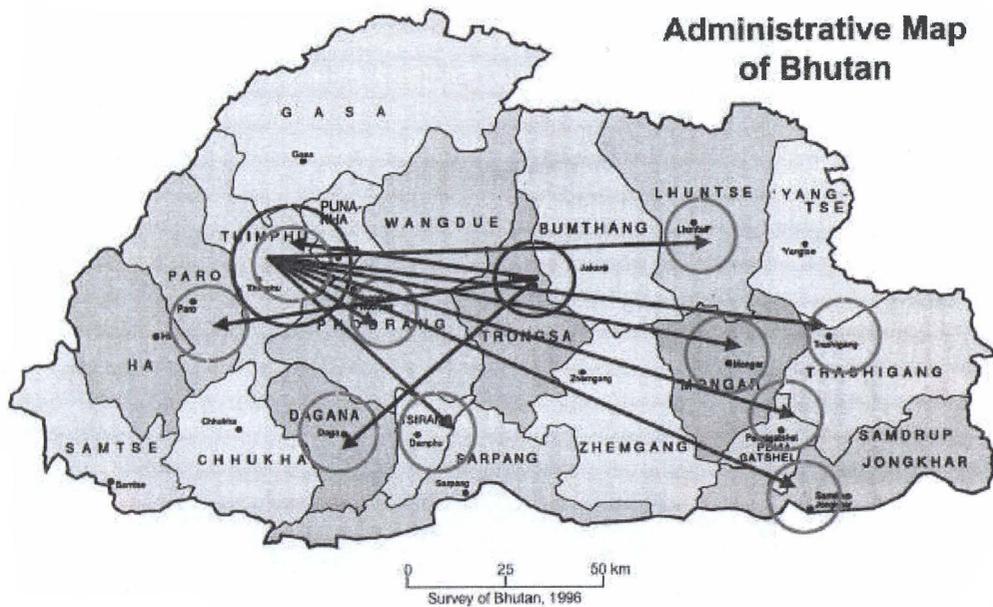


図2 ベチャムの全国的な展開(宮本作成)

国民統合という点からみると、80年代後半にかけて政府がブータン南部に集中的に国民舞踊としてのベチャムを導入していったという事実は興味深い。というのも、この時期、政府は国内のネパール系人口の割合の高さに危機感を募らせ、積極的な伝統文化保護政策を導入するとともに不法移民の追放という名目での移民排除を実行して、ネパール系住民が多く居住するブータン南部一帯は、その主なターゲットとなっていたからである。そうした点からも、ベチャムの全国的な展開の背景に、国民を啓蒙し、彼らから仏教伝統に基づく国民文化に対する尊重や愛着を引き出し醸成したいとする政府の意図を見出すことは難しいことではないだろう。²

また、仮面舞踊局の設立と前後して、上述のトンサのベチャムに加え、パロ県からのゲンドゥクパラ、デギャッチャム、ブムタン県のウラ郡からはツェリンチェンガ、スムタンツェンチャム、タンシビポレモレ、同じくブムタンのチョコル郡からはタンビバルチャム、ジャンバラカンセンゲチャム、タムシンペリンチャム、パッチャムが、同ブムタンのタン郡からはヤクチャムの19演目が国家舞踊として認定された。さらに、タクセンチュンドウチャムやチュンツァムのような新しい舞踊もまた導入された。[Dorji 2001]

こうしたベチャムの演目とその起源を辿っても明らかなように、当初からブータンに存在していたチャムは、各県や村によって異なっており、特にグル・リンポチェやペーマ・リンパゆかりの伝説が数多く残るブムタン県やトンサ県では多様性が維持されていたが、現在ではそれらの間の差異は薄れ、チャムは一程度標準化された形で全国に展開していったのである。

4. ベガルパからミナップへ

さて、第三代国王が開発に着手した50年代から60年代には様々な制度改革が行われていったが、ベチャムの展開もまたその一環として考えることができる。しかし、後の税制改革（物納から現金納へ）によって労役が削減され、伝統的なゴ（男性用の民族衣装）を着用した国王の従者（ベガルパ）たちが西洋の制服を身に付けたスマートな親衛隊へと姿を変えていくなかで、ベチャムの担い手もまた否応なく変遷していった。現在までに各地のゾンでは、宗教的なチャムを出家僧



写真 9 トンサ・ゾンのベ・チャムのために近隣の村から集められた舞手たち。幕間には更衣場所の隅で昼食や飲み物をとって寛ぐ。(2009年 宮本撮影)

たちが担う一方で、ベガルパによって担われてきた踊りを今度は地域の村人（ミナップ）が担うようになっている。

その組織方法は地域によって異なるが、トンサ県のゾンの例によれば、ゾンが村人から徴発するのは、ベチャムを踊る男性の踊り手たちとアツアラ（道化）役の男性の演者たち、そして女性の歌い手である。

ベチャムの踊り手とアツアラの演者は各郡や村のツェチュでの達者な踊り手などを中心に選出され、毎年決まった者が行くことが多い。他方で、劇間に民俗歌謡を披露する女性の歌い手たちは、毎年一つの郡から歌の上手い者が代表として集められる。女性の歌い手は、毎年郡の持ち回りで行われるため、数年に一度の負担となっている。

僧侶と俗人のどちらでも、チャムの踊り手全員のなかで最も能力のある者はチャンペンおよびチャムジュとして選抜される。前者が一番手として列の先鋒を務め、後者は二番手として殿を務める。彼らは熟練した踊り手として演者全体を率いるとともに、演者の指導に当たることを義務付けられている。

道化役のアツアラは一般に俗人によって演じられるが、チャムとチャムの間で即興劇などを演じて余興を担うと同時に、プログラム全体の進行役であり、また時にベ



写真 10 トンサ・ゾンに集められた女性たち。全員女性用の国民服キラを身につけ、正装用のスカーフ(ラチュ)を掛ける。写真のように揃いのキラを纏う場合もある。(2009年 宮本撮影)



写真 11 年一度のチャムのために覆布を外され準備された仮頭(トンサ県 N 村 2004年 宮本撮影)

チャムの演者としても活躍する。アツアラ役の演者はしたがってツェチュ全体の構成や個々の演目についての深い知識が必要とされ、リーダ格のアツアラはしばしば前のチャンペンやチャムジュであることが多い。彼らは時にベチャムの指導者としても活躍し、チャム全体において不可欠な役割を果たすのである。

さて、郡から徴発された演者たちは、ツェチュのおよそ1カ月前から毎日ゾンへと通い練習に明け暮れることになる。毎日、昼休憩をはさんで朝8:30から夕方5:00までが練習時間として決められている。ブータンの村落地域ではまだ自動車が整備されていない場所が多く、遠隔地の村人にとってはゾンのある中心地へ容易にアクセスできない場合も多い。そのため、トンサ・ゾン周辺の知人の家に泊り、通う者も少なくない。ゾンの構造はシャブドゥン時代の伝統を維持しており、建物の半分は宗教界に属し僧院として構成され、半分は世俗界に属して県の行政としての機能を担っている。僧院を含むゾンには、従って、一般の者は泊れない決まりとなっている。参加者たちは練習日も本番も一律日当100ヌルタム（日本円で約200円から250円）を与えられ、祭りの当日は昼食が供給される。こうしたレートは近年のブータンの標準的な日当に比較しても決して高額ではなく、移動や宿泊に際する費用を考えるとほぼ無償労働に近く、特に遠隔地の村人には大きな負担となっているようだ。³

また、ゾンでのツェチュとは別に村のラカン（寺）で伝統的にチャムを取り入れたツェチュを開催してきた地域では、村単位のツェチュと県単位のツェチュとの開催時期が重なることで踊り手をゾンに奪われてしまい⁴、ときに共存が困難となっている。こうした状況においては、村側が開催日を（仏教カレンダーにおける「よき日」から）



写真12 トンサ県N村のツェチュにて。チャムの踊り手とアツアラ。

(2004年 宮本撮影)

ずらし、延期するなどして妥協を迫られることになる。このように、ツェチュを「ブータン文化」の要として保護・推進してきた政府の文化政策の下、ゾンのツェチュが地域の共同体の成員を巻き込んで中央集権的に管理・整備されていく一方で、村落社会のツェチュもまた様々な形で変容を迫られつつあるといえるだろう。

参考資料

Dorji, S., 2001, *The Origin and Description of Bhutanese Mask Dances*, Thimphu.

Tashi Dema, 2010, “Behind the masks and dances” in Kuesensel, Mar 14.

宮本万里、2009年 (a)、『自然保護をめぐる文化の政治—ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策—』風響社。

宮本万里、2009年 (b)、「ブータンの変遷—依存を通じた自立の戦略—」『東洋文化』第 89 号、323-338 頁。

宮本万里、2008 年、「森林放牧と牛の屠殺をめぐる文化の政治—現代ブータンの国立公園における環境政策と牧畜民—」『南アジア研究』第 20 号、77-99 頁。

宮本万里、2007 年、「現代ブータンにおけるネーション形成：文化・環境政策からみた自画像のポリティクス」『人文学報』第 94 号、77-100 頁。

¹ グル・リンポチェに因み、毎月の十日前後に各地の寺院で取り行われる祭祀の総称。政府直轄の僧院のほか、村の寺や私有の寺院でも催される。チャムを伴う大規模なツェチュは概ね年に一度、しばしば秋から春にかけて取り行われる。

² 現代ブータンの国民形成における文化政策の位置づけ等に関しては宮本[2007, 2009b]に詳しい。

³ トンサ県やブムタン県では、グル・リンポチェやペーマ・リンパゆかりの寺院が多く点在し、地域社会が古くから独自に様々な祭祀や儀礼を実施してきたため、個々の共同体の内部に踊り手を養成するシステムが既に醸成されていたといえるだろう。しかし、南部のチランなど地域に伝統的な仏教寺院の少ない地域では、ゾンでのツェチュに際して踊り手の訓練や募集が非常に難しくなっており、(賃金は支払われるものの)しばしば強制力と懲罰(罰金や警察への告発など)を伴う徴発の形で人員確保が行われている[Kuensel 2010 Mar 14]。学校教育の浸透等で人手不足が急速に進行するなか、集中的な訓練のために長期間家を空けなければならない担い手には大きな負担が課せられているといえるだろう。地域住民の協力や貢献を不可欠として中央集権的に構築されてきたゾンのツェチュとチャムは、(パロやティンプーなどの観光化したツェチュ以外のケースでは特に)人手と資金の不足によって現在大きな岐路に立ちつつある。

⁴ これらの祭祀の開催時期はブータン暦(太陽太陰暦に近い暦)のカレンダーに沿って 10 日から 15 日付近に決められることが多く農閑期にはゾンと村で開催日が重なることも多い。